ラディカル文化地理学に向けて
－理論の諸問題－

デニス・E・コスグローヴ
（中島弘二　訳）

Denis, E. COSGROVE
Towards a radical cultural geography: problems of theory
Antipode, 15, 1984, 1-11.
© 1996 by the editor of Antipode

人類は、内省的存在としてその感覚的・物質的現実への直接的な参加 engagement を通して、自然的世界を人間的世界として経験し改変する。そうした物質的生活の生産と再生産は間違いなく集合的なアートであり、それは意識によって媒介され、コミュニケーションの諸コードを通して維持されるものである。この後者こそが象徴生産であり、そこでの諸コードはその形式的意味での言語を含むだけでなく、ジェスチャーや服装や個人的・社会的振る舞い、音楽、絵画、ダンス、儀式、セレモニーそして建築までも含むものである。しかしこれらのリストでさえも、それを通して我々が自らの生きられた世界を維持するような象徴生産の広がりを汲み尽くせるものではない。なぜならすべての人間活動は同時に物質的であり象徴的な生産とコミュニケーションに他ならないのだ。世界の象徴的な領有は、歴史的・地理的に種別的な固有のライフスタイル（生活諸様式）と諸景観とを生みだす。人間と自然との相互作用のこうした次元と、空間の秩序化におけるその役割を把握し理解することは、文化地理学の仕事なのである。

文化の正確な定義を与えようとする試みからはほとんど得られるものがない。それを行なうことは客観的カテゴリーへの文化の還元を意味し、その本質的な主観性を否定することである。文化概念を創造した西欧ブルジョワジーを除いては、いかなる人間集団も自らの生きられた世界を一つの文化的産物とみなすことはない（Sahlins, 1976）。世界とはイデオロギー的なのである。ウィリアムス（Williams, 1977）は変わりゆく歴史的諸条件のもとでの英語言語における「文化 culture」という語句の変容を分析し、それがプロブレマティクなカテゴリーとして物質的な社会生活からどのように概念的に分離されてきたのかを示している。現代的な使用においてさえ依然として「文化」は社会的存在の基本的諸局面を結び付けることに役立っている。すなわち、(1) 労働、生産における自然の中での人間の直接的相互作用（農業 agriculture、ぶどう栽培 viticulture、育林 silviculture）、そして (2) 意識、諸観念、諸価値、諸信念、そこにおいて人間が自然の総体的物質性を乗り越え可能な主体として自己を意識するようになる道徳的秩序（原始的文化、階級文化、対抗文化）。文化はヒューマニズムの中心的な項であり、客観的で測定可能な概念として整然と定義できるものではなく、実践 practice を通してのみ理解されるものである。

人文主義地理学は、その目的、すなわち人間諸集団の生きられた世界を理解することにとっての中心として文化をとらえている。一方マルクス主義地理学は、生きられた世界は象徴的に構成されているけれども物質的であるということを自覚しなければならず、またその客観性を否定してはならない。生きられた世界は自由な人間意識の単なる産物ではなく、正確には主体と客体、意識と物質世界との集合的な出会いなのである。観念論や還元主義的唯物論に陥ることなく文化と自然との弁証法を保つことこそが、史的唯物論にとっ

ての中心的な理論的課題なのであり（Thompson, 1978）、またマルクス主義地理学の構築にとっての課題なのである。本稿では、文化地理学が伝統的にそうした弁証法を認識してきたこと、しかしその実践においてそれを保持することに失敗したことが議論される。史的唯物論における人文主義的伝統は、文化地理学の伝統的関心を維持し明確にするための枠組みを提供し、そしてラディカル地理学のプロブレマティクを一種の経済決定論へと還元する傾向に対して一つの対抗的立場を与えてくれるのである。

マルクス主義と文化地理学は文化の意義に関して重要な基本的諸前提を共有しているが、異なる様式において、また異なる理由において、両者ともに実践におけるそれらの諸前提を保持することに失敗しており、相互の対話を発展させることはなかった。本稿はマルクス主義文化理論と文化地理学との統合の可能性を示す前に、これらの諸問題を検討するものである。そうした統合は独立したサブ・フィールドとしての文化地理学という観念に新たな息吹きを吹き込もうとするものではない。それはブルジョア諸学問の制度史によって与えられた正統性を越えて、一つの正統性もった固有の「学問 discipline」として地理学を引き受けることを示唆する以上のものではない。真にラディカルな地理学とは統一的な活動領域、すなわち史的唯物論の実践の中での一つの重要な視点に過ぎないのである。

マルクス主義と文化地理学－共有された諸前提－

マルクス主義と文化地理学の両者は同一の存在論的立場から始まる。あらゆる形態の決定論や線状の因果論的説明に厳格に抗することにおいて、それらは人間と自然との関係を歴史的なものとして特徴付けることを主張する。人間（男性と女性）は自らの歴史と彼等自身を作るということは、史的唯物論の第一の前提である。文化地理学の観点からは、マイクセル（Mikesel, 1978）が文化地理学は必然的に歴史的であることを強調した。人間主体が地表を改変し場所と景観を創造することは解釈学的理解を必要とする一つの歴史的過程であることから、カール・サウアー（Sauer, 1941）はそれ（文化地理学）を文化史の一部分と呼んだ。このように一見したところ文化地理学の関心は史的唯物論の観点からの取り扱いにふさわしいものであるように見える。

マルクスとエンゲルス（Marx and Engels, 1972）は歴史の唯物論的概念の諸前提を素描している。すなわち、歴史の記述は人間生活の自然的諸基礎――人間存在の物理的性質、その中に人間が自分自身を見出すところの自然的諸条件（地質的、植生的、気候的）――と、時代を通じた人間的実践を通してのこれらの諸条件の改変から、それを始めねばならないということ。我々は物質的生活と生計維持の諸手段を一定の諸様式において生産する――それは社会的活動である――ことにおいて真に人間となるということ。「生産のこの諸様式はそれが諸個人の肉体的存在の再生産であるという側面からだけ考察されるべきものではない。それはむしろすでにこれら諸個人の行動の一定の仕方、かれらの生活をあらわす一定の仕方、かれらの一定の『生活様式』に他ならない」ということ。そして最後に、社会的交通における諸個人の性質はかれらの生産を決定する物質的諸条件に依存しているということ。マルクス・エンゲルスは、社会と自然は一つの有機的全体として考察されるべきであることを、はっきりと主張している。それらは弁証法的全体を形成しているのである。すなわち各々は他方の否定であるが、しかし各々はその存在を他方に依存しているのである（Colletti, 1975）。この全体の二つの道筋は人間的生産によって媒介されており、それは自然を人間的環境として再生産し、そして人間を社会的存在として再生産するのである。生産様式は、かれらが強調するように、意思を持った人間的存在によって物質世界に基礎付けられた一つの生活様式に他ならないのである。

初期の文化地理学者は地理的決定論の知的環境の中で仕事を行なった。そこでは非－物質的な文化現象でさえも「地理的諸要因」の結果とみなされたのである（Burgess, 1978）。彼らは社会の統一や史的理解の重要性を過度に強調しすぎた。ポール・ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュ Paul Vidal de la Blache とカール・サウアーCarl Sauer は、ヨーロッパおよびアメリカの文化地理学の初期の発展における重要な人物である。ヴィダルは人間生活と自然との関係をマルクスとエンゲルスが輪郭を描いたものとまさに類似のものとして認識した。彼は次のように主張する：

「地理的個性は地質と気候に対する素朴な考察から生まれるものではない。それは自然によって予めその運命を定められたものではない。地方とは、そこで休眠中の生命の種

子が自然に播かれるが、しかしそこでのそれらの成長と利用は人間に依存しているような一種の母胎である、という観念から出発しなければならない。土地に個性を提示するのは、その土地を自らの利用に従わせるところの人間である。人間は分散して存在する諸特徴の間を結びつけ、ローカルな諸状況の不統一を諸力の体系的な集合体に置き換えるのである。このようにしてある『地方（ペイ pays）』は自ら特徴を生み出し、分化し、そして時がたつにつれてついには人々の肖像を打ち抜いたメダルのようになる」(de la Blache, 1903, p.8）。

自然は人間の利用を通じて人間化されるのであり、人間活動を除いては形態も統一性ももたない。そうした活動は、その環境の中で、社会と自然をある生活様式（まさに前述の言葉によってマルクスとエンゲルスが用いたものである）のもとに再生産し、地理学的研究の中心的対象である特定の諸地域（ペイ）を生起させるのである。生活様式とは文化と自然の統一である。それは歴史的に変化し、そして地理学の的研究の対象の形態と規模を変化させるのである。ヴィダルは産業資本主義のもとで生じるそうした変化を次のように観察している：

「太古の昔から村々やそれらが表わす村落共同体はそれらの間で耕作地を分割し、小さな世界を構成していた。各々の世界は一つの自律的な存在に必要なもの――原野、森、牧野――をすべて供給していた。それらはまたお互いの間で一種の空間的間隔を見出していたのであり、事実上数 km 以上には違わない距離のリズムに従って分布していた。（しかし）鉱業の集団化はこれらの必然性を無視し、単一の必然性しか認めない。それは鉱山との接触を維持するという必然性であり、輸送手段が鉱業の生き残りのために必要なすべての諸要素を集中させる特権的な結節点に鉱業を位置づけるという必然性である」（de la Blache, 1917, pp.161-162）

ヴィダルにとって景観は変化の証拠を内包し、生活様式と環境の弁証法はそうした変化を反映すると同時に促進するということを意味している。ヴィダルの認識は地理学と歴史学における彼の実践から生まれているが、それはマルクスがヘーゲル観念論との哲学的遭遇から導き出したものと実質的に同じ認識である。

合衆国においてカール・サウアーは地理学における景観研究の礎石として文化と自然との弁証法的統一を強く主張した。彼の初期の方法論的エッセイである「景観の形態学」（Sauer, 1925）においてサウアーは、景観において共存する諸対象は、そこで土地と生活とが一体となって見いだされるような目に見えない全体を形作っていると主張した。この論文において彼は自然景観と文化景観とを概念的に分離し、前者をその改変過程において「文化」が作用する舞台とした。後の諸論文（Sauer, 1941, 1952, 1956）においてサウアーは、「自然」景観の概念よりも自然の「文化的評価」を人文地理学研究の出発点として強調するようになった。しかしサウアーは文化の発生と性質に関する具体的な理論を提供してはいない。「われわれは文化なるものCulture ではなく、諸文化 cultures を取り扱うのである」（Sauer, 1941, p.378 ; Duncan, 1980）。これらの「諸文化」は環境改変においてあたかも自然の基礎づけからは切り離されたような能動的諸力として物象化されてしまっている。しかし諸文化は、「発明されあるいは獲得されてきた態度や選好」を含む「獲得された慣習」のセットであり、それらは不断に変化を被るものである（Sauer, 1941, p.359）。そうした獲得と変化の様式、すなわち諸地域の中で文化的諸特性が相互に結びつき、生活様式と景観の「個性」を生みだすような様式は――言い換えればそれこそがマルクスとエンゲルスによって提起された重要な理論的問題であった――、「いかなる体系的な発展の方法をも越え出て」いるのである（Sauer, 1941, p.358）。サウアーは人類学的「参与観察」――ごく近年の地理学において形式的観念論として論じられている（Guelke, 1974）――という研究のもとで、学生がある時間と場所での文化集団のメンバーにおける一つの立場へと自分自身を位置づけるような解釈学的研究を推奨していたのである。こうした方法は形式理論と説明の方法を回避する。サウアーはこのようなアプローチを採用し、人文地理学を文化史の一部として認識していたのである（Gombrich, 1969）。ヴィダルもサウアーもともに、地理学における強固な決定論に直面して、人間の文化をそれ自体、自然を改変する決定的な力として強調したのである。そのどちらもマルクス主義への明示的な言及や、それとの接触を行なってはいない。しかし彼らはマルクス主義の基本的な諸前提を共有し、たぶんそれゆえに地理学における文化研究のためのより明確な理論的基礎を提供する機会を失ってしまったのであろう。そしてサブフィールドにおけるその後の研究の大部分は、彼らが支持した弁証法を維持することに失敗したのである。

文化地理学の不適切性

ヴィダルとサウアーは、ペイや文化景観のような静態的・形態学的な諸概念とともに、生活様式と人間主体 human agency という動態的あるいは過程的な諸概念を文化地理学に与えた。どちらの概念の組み合わせも自然と文化の関係を弁証法的に理解することに基本的に依拠しており、単線的・決定論的な説明形態に絶対的な優越性を与えるものではない。ヴィダルとサウアーは実際にこうした点を保持しながらも、一方で非ー未開社会における文化の階級的次元を見落とし、また文化を人間の純粋な創意工夫の産物とみなす傾向にあった。そして後にこうした弁証法的アプローチは放棄されてしまった。レイ（Ley, 1977）は、ヴィダル学派、特にジャン・ブリュンヌ Jean Bruhnes のもとでのそれは弁証法的アプローチの後退へと向かい、歴史的コンテクストから切り離され機能的に処理された景観諸事象の収集と分類に陥ってしまったと指摘している。人文地理学を実証科学とみなす初期のサウアーの主張（Sauer, 1925）や、そこから彼が支持した方法論的立場はその後容易に受け継がれていったが、伝播研究を除いては過程に対する彼の関心が受け継がれることは少なかった。弁証法は人間的生産の歴史的特殊性を通じては伝達されなかったのであり、その結果、それは変化の担い手としての文化の観念論的物象化か、あるいは「可能論」という名で威厳づけられた半決定論へと解体していったのである（Martin, 1951）。このことが文化地理学を理論的に不毛な状況にとどめたのであり、その結果理論的な空白に存在する文化地理学研究の多くは景観理解における文化の重要性に対するセンスを保持しながらも、それを理論的言説の展開へと拡張することに失敗したのである。

文化地理学の理論的脆弱性はその弁護者の多くが認めるところである。ワグナーとマイクセル（Wagner and Mikesell, 1962, p.5）は、「文化地理学者は文化の内的作用の説明や土地に影響を与えるような人間行動の全的パターンの記述にはあまり関心がない」ことを明白に認めながら、ダンカン（Duncan, 1980）が示すように、それ以来この立場からは後退してしまったのである。ごく最近、マイクセル（Mikesell, 1977, p.460）はそれ以降の文化地理学の折衷主義について記している。

「…文化地理学という学問的知識はその個別的選好を示している。すなわち歴史的志向、環境改変の担い手としての人間の役割の強調、農村地域への偏向、物質文化への専心、人類学からの支持を求める傾向、そして安楽椅子派の地理学よりもフィールドワークへの選好」。

『文化地理学の基礎』（Wagner）シリーズにおいて出版された諸研究は、空間科学が人文地理学における支配的なパラダイムであるような困難な時代においてさえ、伝統的文化地理学の個別的選好の広がりとその活力とを例証している。それらは栽培植物と家畜の起源と伝播（Isaac, 1970）、宗教的価値の景観に対するインパクトや分布（Sopher, 1967）、住居タイプの起源と意味（Rappoport, 1970）、アメリカ文化の地理的起源と結果（Zelinsky, 1973）といった多様な諸問題をカヴァーしている。そのパターンは非常に拡散しており、人はその目的や方法の統一性よりも指導的原理としての経済理論や社会理論の援用の拒否という点で文化地理学を特徴づけたくなる誘惑にかられてしまうほどである。しかしながら一定の再帰的テーマがそこには見いだされうる。

環境改変者としての人間というテーマに従うことによって、文化地理学者は様々な諸技術の媒介を通じた地表面の物質的改変の証拠を記録してきた（Thomas, 1956）。このことは栽培植物や家畜の起源、火や水やその他のエネルギー資源の人間による利用の自然環境へのインパクトといった問題に対する理解に重要な貢献を生みだし、生態学理論と拡散理論に対する地理学的貢献を導いてきた。しかし技術的な取り扱い法の強調は、技術の進化がそれ自体の内的契機を持つか、あるいはさもなければ適応と拡散の生態学的諸原理に訴えることで環境諸条件に基礎を置くか、という決定論の形態へと向かう傾向を有している。このような物質的手段に対する強調は、人間諸集団と環境との関係の上に歴史的に生みだされてきた観念や態度、信仰や価値といったものに焦点をあてる人々（Glacken, 1967；Tuan, 1968, 1974）からの挑戦を受けている。そうした諸研究は「世界観 Weltanschaung」をそれ自体の内的論理と自己変革を兼ね備えた自律的なものとして取り扱う傾向（Glacken, 1967；Samuels, 1979）にもかかわらず、必然的に信念体系の起源と変容という問題を提起するのである。トゥアン（Tuan, 1974, 1977）は生物学的あるいは生理学的に普遍的な人間的属性に

それらの根拠を求めるという誘惑に屈し、変化を説明するための余地をほとんど与えることがなかった。一方、ハーディン（Harding, 1975）とニューソン（Newson, 1976）は、これらの諸問題についてはマルクス主義の理論と発見から得るところが大きいことを示してくれた。文化地理学者における技術と人間労働と諸資源（生産諸力）に対する伝統的な関心は、生産諸関係――これらの諸力を構造化し意味を与える社会的相互作用の形態――に対するより最近の関心によって練り直されてきたのである。ワグナーは象徴的相互作用に基づいた文化の理論を提示し、「もしすべての行動は社会的ー感覚的コンテクストにおけるコミュニケーションであるという見方を採るならば、文化の実質的内容からコミュニケーション過程を切り離すことは困難となるだろう」と述べた（Wagner, 1972, p.5）。ダンカン（Duncan, 1973, 1978, 1980）も同様の見解を発展させた。しかし人間行動は社会的ー感覚的コンテクストを離れては考えられないのであり、そうしたコンテクストの本質は人間的生産なのである。「『文化』と呼ばれてきたものは人々の間の相互作用に還元しうるものである。個々人の他者との相互作用こそがその人の性質を形作るのである」というダンカン（Duncan, 1980, p.196）の主張は、「文化」の物象化に対する重要な警告ではあるが、しかしそうした見方は物質的コンテクストを見落としている。ここで欠けているものは、「生産諸関係の支配（すなわち剰余収奪の形態とそれに対応した生産手段の社会的配分の形態）によって構造化された生産諸関係と生産諸力の接合された組み合わせ」（Hindess and Hirst, 1975, p.9 括弧内コスグローブ）としての生産様式という概念である。人間環境の担い手に関する文化地理学の研究は、こうした概念――それ自体自然の文化的構成の物質的基盤の概念的統一体である――を洗練するのに役立つであろう。

もし文化地理学における「人間ー環境」というテーマが、ついぞ接触が維持されることのなかった文化地理学とマルクス主義の双方にとって共通の関心の一つであるとするならば、景観に対する文化地理学者の関心の方がよりいっそう理論的言説からはかけ離れたものである。しかし潜在的には、それはマルクス主義が見落としがちであった次元をマルクス主義にもたらしうるかもしれない。人間活動によって生みだされ維持されてきた場所の個性に対する認識は地理学の恒久的な基盤であり、実際にその最も重要な学問的貢献に他ならない。しかしあまりに安易にこうした認識を掲げることは、文化地域の特性を定義するための記述に陥ってしまう。そうした例は、例えば文化地域の核や領域や縁辺についての議論にみられるような文化地域の境界や構成要素（Meinig, 1965；Nostrand, 1970）、集落タイプや地名、家屋、納屋、作物結合などの地図化に見られるような文化地域の内的諸要素の一貫性（Zelinsky, 1955, 1973；Kniffen, 1965；Jordan, and Rowntree, 1976；Franzer-Hart, 1986）などにおいて明らかである。マイクセルが言及したような農村への偏向や物質文化への集中が最も明瞭に見いだされるのは、これらの景観における文化指標についての無数の、しばしばくどいまでの、研究の数々においてなのである。地域研究が地理学のすべての諸分野にとって共通のものである限りにおいて、文化地理学はその証拠によって自己を区別してきたのであり、その証拠の特定の性質に基づいた理論的洞察の発展によってではない。

分類の不毛さは、もちろん、意味でみたされた意志的な人間活動の産物としての場所と景観という認識を構築する試みによって挑戦されてきた（Relph, 1976；Ley, 1974 and Samuels, 1978, 1979）。こうした仕事は人文地理学における文化の理解を押し広げ、社会諸科学、とりわけ実証主義に批判的な諸学問の洞察へより密接に結びつけるという価値を有している（Entrikin, 1976）。しかしながら人文主義地理学は理論に対して批判的な傾向にあり（Ley, 1979；Harris, 1978；Wallace, 1978）、その注意の焦点は個々人へと向けられ、より広範な物質的・階級的諸構造へは十分な注意が払われていない（Rowles, 1978；Seamon, 1979）。生産諸関係の歴史的検討を見落とすことで、それらは現象学的観念論へと陥ってしまうのである（Cosgrove, 1978）。しかしながら近年二つの議論が特定の建築景観の生産における階級的対立とイデオロギーに対して多くの注意を払っている。サクレ・クールに関する研究を行なったデヴィッド・ハーヴェイ（Harvey, 1979）と、19 世紀の博覧会に関する議論を行なったバーバラ・ラビン（Rubin, 1979）は、明示的なマルクス主義的カテゴリーを用いることで、ともに景観の意味に関する彼らの分析を支配的生産諸関係の研究の上に基礎づけている。ラディカル地理学者たちは、社会経済構成体 social and economic formation の概念が、その地理的種別性において、地誌学 chorology――特定の諸地域においてそれら諸地域の個性を決定

する諸要素の総合――に対する永きにわたる地理学者の関心をラディカルな言説へと導入することを可能とするものであることを示した（Santos, 1977；Gregory, 1978）。ヴィダルが認識したように、文化地域の性質とスケールは支配的生産様式とともに変化し、それを構造化すると同時にそれによって構造化されているのである。社会経済構成体の概念は、支配的生産様式に下属する生産様式の重要性とともに、そうした下属的生産様式の特定の地域への張り付けに対する認識を有するという点においてフレキシブルである。20世紀後期の構成体における支配的様式としての法人資本主義の世界的浸透は、初期資本主義の大スケールの国民国家の国境をも横断している。そこでは文化地理学者によって伝統的に研究されてきた地域的特殊性の多くが不明瞭なものとなってきているのである。例えばテキサコ Texaco の石油基地はそれがアッピア街道沿いに立地しても、インターステート66号沿いに立地してもほとんど同じなのである（Relph, 1976）。こうした現実に直面して、文化地理学者は生産様式と場所との関係を検討するかわりに、納屋や屋根付橋や柵などかつてローカルな諸地域に個性を与えた景観特性の残滓を地図化する懐古趣味にしばしば陥ってしまったのである。人間的場所の意義に対する感性と理解をマルクス主義理論へと統合することは、文化地理学者による非常に貴重な貢献となるであろう。

両者の共有された諸前提や歴史的視点にもかかわらず文化地理学者とマルクス主義的思考との間に恒常的な接触が欠けていた理由を要約することは困難ではない。文化に対する明白な関心はヨーロッパやイギリスの地理学よりも北アメリカの地理学において強固に維持されてきたのであり、「文化地理学」なるものはアメリカ圏以外の地理学科のカリキュラムにおいてはめったにみられない（Jackson, 1980）。資本主義諸国、とりわけ合衆国における学問の制度的クンテクストは、つい最近まで正当な調査研究方法としてマルクス主義に真摯な考察を行なうことを抑制してきた。構造機能主義的仮説が社会調査を支配し、それは猛烈な反共主義者であるアメリカ支配階級の知的側面におけるヘゲモニー闘争を表わしていた（Thompson, 1978）。マッカーサーのレッド・パージが最高潮の頃、カール・サウアーはアメリカ地理学における現在的状況の普遍化と歴史的コンテクストの無視という傾向を指摘していた。彼はこうした状況に対する説明をアメリカ地理学が制度化された歴史的諸条件に見いだしている。「20世紀初頭の中西部の単純なダイナミズムにおいては歴史的成長や後退に関する複雑な微積分学は特に現実的であるとも重要であるとも思われなかった」（Sauer, 1952, p.354）。サウアーは社会的・歴史的コンテクストに対する地理学的理解の不十分さの理由を正しく位置づけているが、しかし彼はそのことと支配的なアメリカ的イデオロギーとの広範な関係を見抜くことはなかったのである。

一方、国際共産主義 international communism のリーダーであるソヴィエトは、レーニンの時代から1950年代後期のスターリンの否定に至るまで、マルクス主義の諸学問を支配してきた。史的唯物論はソヴィエト国家の意図、すなわちその経済的発展と合衆国との経済的・政治的対等性の獲得といったものに従属させられた。ソヴィエト・マルクス主義は、自らが否認することを主張したブルジョア的決定論と少しも違わない経済決定論的・還元主義的な文化理論を採用したのである。トムスン（Thompson, 1978）は二つの超大国の国家イデオロギーとそれの諸学問に対する含意の類似性を証明している。双方において、社会-文化的活動に関する静態的な構造的・機能主義的解釈は大スケールの協同組織や計画と管理を正当化するのに役立つのである。このようにマルクス主義文化理論は、人間生活と自然との弁証法における文化の能動的・創造的諸局面に対するオリジナルな立場を提示することがほとんどなかったのである。例えばソヴィエト帝国内における民族的・宗教的伝統に対する弾圧に示されるように、自然の人間的領有と再生産の地理的多様性を抑圧することは、個性を国家機械の横暴な要求へ従属させる、より一般的な政策のほんの一局面に過ぎない。世界資本主義や国家共産主義に対する潜在的に最もラディカルな文化地理学のテーゼは、諸集団はしばしば階級区分を横断してより広範に共有され伝達されたアイデンティティの一部という意味を場所と景観に対して付与するというものである。イスラム原理主義に対する合衆国とソヴィエト連邦双方の対応は、双方のイデオロギーがともに人間活動における文化の積極的役割に対する認識を統合することができないということを証明している。しかしマルクス主義にとっての理論の諸問題は、単に国家の意図のもとへの弁証法的唯物論の従属にとどまるものではなく、さらにそれを越えて深部へと及んでいる。

マルクス主義文化理論の諸問題

史的唯物論の内部での文化理論の展開における諸問題は、その一部をマルクスとエンゲルス自身の仕事に負っている。文化と自然の弁証法的統一については、『フォイエルバッハ』と 1844 年の『草稿』（Marx, 1961）にはっきりと述べられている一方で、マルクス自身が後の著作においてブルジョア的諸前提の影響を避けられなかったことが指摘されてきた（Sahlins, 1976；Thompson, 1978；Williams, 1977）。このことはとりわけ社会的生産を普遍的に物質的財の生産とみなす彼の傾向において見られる。同様にマルクス主義は実践の哲学であり、世界を変えることへの革命的参画であるとする見方は、社会進化の鉄の法則を史的唯物論が提起するという意味として文字どおりにとられがちである。そこではそうした法則をいったん把握すれば、資本主義の崩壊とそれが導く新たな生産様式の確立という結論を社会的現実に対して課すことが可能となるとされたのである。こうしたユートピア主義は非歴史的であると同時に、スターリンやポル・ポトの支配のように殺人的でもある。そのことは文化的抑圧へと結びつき、コラコフスキーKolakowski のような作家にマルクス主義は人間の自由に不可避的に敵対すると結論づけさせるような、マルクス主義の全体主義的側面を説明している（Singer, 1980；Kolakowski, 1978）。しかし実際には、支配的イデオロギーとしてマルクス主義を採用している諸国家においても全く異なる社会構成体が出現しているという事実が、空間における文化的・歴史的多様性の一貫した重要性を証明しているのである（Samuels, 1978）。この問題はここで十分に論じるにはあまりに大きすぎる。それは学問における史的唯物論の実践のための含意を有するからこそ提起されるのであり、実践 praxis に対するより広範な観点を保持し、世界を形づくるための自己の役割を認識する一方でバリケードへのユートピア的要求を慎むようなマルクス主義的学問の伝統が確かに存在するということを強調するためにこそ提起されるのである。

こうしたよりヒューマニスティックな伝統はグラムシ Gramsci やウィリアムス、トムスン、サーリンズ Sahlins のような人々によって維持されてきた。それは、象徴的に領有され生産された物質世界に基礎づけられた象徴化作用としての一連の文化理論を認めうるような素材を提供してくれる。剰余生産が支配階級によって領有される階級社会においては、象徴的生産はすべての階級に横断的に課せられているヘゲモニックな階級文化として同様にとらえられている。自然世界の地理的多様性は、支配的および下属的な生産諸様式の歴史的可変性および種別性と結びついて、広範な社会経済構成体を生みだす。各々の社会経済構成体はそれぞれの生活様式を持ち、そこでの象徴的生産の種別的性格が特定の景観を生みだすのである。そうした研究において、文化地理学は実践を通して理論を洗練することができるのである。

マルクス主義文化理論の直面する中心的困難は、生産様式がその実践において生活様式として、すなわち人間生活とその物質的世界の生産と再生産に従事する意識的・自省的な人間存在の表現として認識されるような弁証法的契機を維持することにある。たいていのマルクス主義においては文化の能動的役割は「欲求充足という強固で単線的な論理に包摂されて」（Sahlins, 1976）きた。同様な文化の還元は生態学的・社会生物学的理論の本質でもあり（Sahlins, 1977）、実際マルクス主義がそうしたスタンスを採用したということは、マルクス主義自体がブルジョア的思考によって影響づけられている程度を示しているのである。こうした還元は一般的に『経済学批判』の序言におけるマルクスの定式化に由来する土台－上部構造モデルの適用に起因している。

> 「この生産諸関係の総体は社会の経済的機構を形づくっており、これが現実の土台となって、そのうえに法律的・政治的上部構造がそびえたち、また一定の社会的意識諸形態は、この現実の土台に対応している。物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的生活諸過程一般を制約する（Marx, 1970, p.20）。」

マルクスはさらに続けて「経済的基礎の変化につれて、巨大な上部構造全体が、徐々にせよ急激にせよ、くつがえる」（Marx, 1970, p.21）と述べ、生産の経済的諸条件における変化が正確に決定される一方で、われわれが変革への闘争を意識するようになるのはイデオロギー的上部構造において、すなわち法律的、政治的、宗教的、芸術的、そして哲学的な諸形態においてである、ということを主張している。

「総体」「対応する」「諸過程一般」といったここ

でのマルクスの言葉は偶有的であり、決定論的解釈を必要としない。しかしそうした言葉が、資本主義システムのブルジョア的カテゴリーによって支配された思考様式においては、物質的生産を売買可能な財の生産として理解するような文化の解釈へと陥ってしまうことは容易に見て取れる。そこでは信念と価値と想像力の相互に連結した諸局面が単線的に決定されてしまうのである。これこそがスターリン主義的アプローチの起源であり、それは新たな社会主義社会の表現と正統化に必要不可欠なものとして新たな芸術と文化を強制的に促進したのである。そこでは宗教的信仰がかつての支配階級の今や不要となったイデオロギー的道具として積極的に抑圧され、すべての文化的表現の諸形態は新たな物質的生産諸関係の当然の反映として国家によって管理されたのである。諸外国の共産党にも次々と課せられていったこのような文化的活動と表現の積極的役割に対する強固な否定は、すべてのマルクス主義は「俗流」――文化生活を物質的活動の単なる随伴現象へ還元する経済決定論――であるとする非難を導くこととなった。

ロシアのマルクス主義者プレハノフ Plekhanov は、このような単線的な文化解釈の理論的正当化を行なった。彼の著作は、彼の地理的思考とのつながりや文化への関心、そして弁証法擁護の主張といった点において興味深いものである。『マルクス主義の根本問題』において、彼はラッツェルに依拠して自然と文化の問題に取り組んでいる。経済の発展は「まず第一に地理的環境の性質に言及することで解決され」、そして「地理的環境の諸特性が生産諸力の発展を決定し、次いでそうした発展が経済的諸力の、それゆえすべての社会諸関係の、発展を決定するのである」(Plekhanov, 1962, p.54　傍点部はコスグローブ)。ここでの鉄の因果律は地理的決定論の歴史におけるあらゆる理論と同様に荒削りのままである。マルクスの定式に基づくことを主張する一方で、プレハノフは変化を技術的進化によって説明する文化地理学者と同じ陥穽――すなわち生産諸力を社会諸関係の決定因とする見方――に陥ってしまったのである。しかしマルクスは生産諸関係の総体に訴えたのであり、そこには物質的生産に従事する人間諸存在の間のすべての諸関係が社会の「経済構造」を構成するものとして含まれている。構造はプレハノフが見落とした弁証法的契機としての上部構造によって媒介されているのである。

プレハノフはこのような初期の決定論を緩和して、人間の生産諸力の発展（この過程が何かは説明されていない）はわれわれを環境との新たな関係へと位置づけるがゆえに地理的環境の影響は「可変的」であることを認めている。このように時間を通じて人間は環境の支配的影響を減少させ、ついにはかつて社会進化を決定した環境に対する支配を獲得することができるのである。プレハノフは文化と芸術に関する彼の後の議論において土台－上部構造モデルを採用し、人間の経済組織が地理的環境と相互作用するのと同じように、上部構造が経済的土台と「相互作用」することを認めている。相互作用は「一見すると史的唯物論の基本的テーゼと対立するように見えるが、しかしこれらすべての諸現象の理解の鍵を与えてくれる」（Plekhanov, 1962, p.27）のである。こうした構図のもとでは、人間の意識は物質的生産に対する、従って所与の活動的生活に対する地理的環境の影響を通じて、生命を欠いた自然の力によって生みだされることとなってしまう。こうした見方は、プレハノフがその追記においてはっきりと受け入れ、説明している弁証法的理解を論理的に支持しえないものであると同時にそれを否定するものでもある。同様の解答は、アルチュセール Althusser の構造主義を含むその後のマルクス主義の定式においても試みられている（Thompson, 1978 ; Gregory, 1978）。そうした見方は最初に人間生活と自然、土台と上部構造とを概念的に切り離し、しかる後にそれらを再統合する構造的な「関係」を求めている。レイ（Ley, 1979）はアルチュセールの構造主義に強く依拠したカステル Castells を批判して、彼の定式の経済主義的帰結を論証している。レイはこうした批判をマルクス主義一般の拒否へと拡張し、もしマルクス主義が決定論的理解へと後戻りするものでないとすれば、それはすべての水準の社会活動は他の水準の社会活動と関係しているという自明の理以上のものではないと主張する。構造的水準における「相対的自律性」の概念は、プレハノフの「相互作用」が理論的な鋭さを欠いているのと同じように、マルクス主義には決定論への理論的必然性があるのかという疑問へとレイを導いている。

土台－上部構造モデルは、文化を「単なる」信仰や価値等の領域として生産から切り離すことで文化の本来の姿を否定するだけでなく、それらの観念や信仰等が社会経済構成体における構造維持の武器として重要なイデオロギー的役割を果たしていることを理解する

のを極度に困難なものとしてしまう。虚偽意識は階級的搾取と支配の維持に役立つ特定の社会諸関係を隠蔽するかもしれないが、しかしそれはなお依然として意識なのである。それは人間集団の生きられた世界 lived-world であり、生産諸力として生きられた世界をさらなる展開へと導くのである。実践の明証性に対応した文化の理解を進めるためには、文化的なものを人間的生産の中に統合し、弁証法的同一性によって物質的な財の生産と結びついた生活様式としての生産様式という概念へ立ち戻らなければならない。人間の意識、諸観念、信仰は、それ自体、物質的生産過程の一部である。これが文化の真摯な検討に取り組んできた近年のマルクス主義思想家たちによって示唆された方向なのである。

戦前のマルクス主義においては、ルカーチ Lukacs とグラムシが文化研究において鍵となる人物として傑出している。両者はともにマルクス主義における歴史法則――そうした法則は人間の意志の作用にかかわりなく変化を説明するという点で著しい科学的硬直性を有していた――に対して懐疑的であった。歴史的変化は人間的変化を、従って意識の変化を意味している。それゆえ彼らは、階級意識を形成し維持する際に文化的局面が重要となると認識したのである。ルカーチはとりわけ文学と芸術文化に傾倒し、一方グラムシは特定の地理的コンテクストにおける文化と階級意識という問題に取り組んだ。イタリア社会経済構成体の独特の次元――「市民生活 vita civile」の伝統、国家の脆弱性、教会とプチブル知識人の役割――へのグラムシの強調は歴史的コンテクストと同時に地理的コンテクストをもわれわれに思い起こさせてくれる。グラムシは客観的な物質的必然性を合理的な人間の意志が対応するものとみなし、こうした合理性の根拠はそれが文化となった時、すなわちそれが自己を常識として確立し、すべての人々によって受け入れられたときに事後的 a postiori となりうるに過ぎないと考えたのである。従って客観性とは弁証法的には普遍的な主観性なのである（Kolakowski, 1978 ; Murphey, 1971）。 階級社会において文化とは階級的経験の産物である。自己の物質的経験に対する各々の階級の常識的な思考はそれ自体他の諸階級との闘争の一部である。なぜなら各々の階級は自己の物質的経験において普遍的に妥当であると理解するものを他の階級にも押しつけようとするからである。すなわち文化的ヘゲモニーとは支配階級の経験から生みだされた文化の首尾よい押しつけであり、社会経済構成体における彼らの支配的立場の必要諸条件の一つである（Anderson, 1976）。グラムシの理論と実践によれば、史的唯物論は一種の人類学であり、文化の産物（文学、言語、芸術、宗教、民俗等）はすべて階級闘争にとって中心的なものである。物質的生産の様式は、それが人間存在の基本的経験であるがゆえに、観念や信仰に限界を設けるのであり、あらかじめ解決手段が開発されていないかあるいは出現していないような諸問題を社会が提起することはないのである（宗教的実践の自由は階級なき社会においては問題 issue となりえない）。しかし人間の意識と物質的生産との有機的関係のあり方は、前者の（例えば階級イデオロギーのような）人間意識において歴史的変化が展開するというものである。イデオロギーが物質的生産の道具に過ぎないのと同様に、物質的生産もそれ自体イデオロギー的活動の道具となるのである。

グラムシは、階級社会においてある階級的関心がすべての諸階級にわたって普遍化している場合、文化と物質的生産の関係は階級的利害からは明確に切り離された集団によって接合されると主張した。この集団とは知識人に他ならない。イデオロギーの最も高い水準において、知識人は支配階級の生活世界を哲学へと、とりわけ物質的生産における支配階級の客観的立場と対応する哲学へと接合するのである。より低い水準において、知識人の仕事は哲学を信念へと翻訳すること、すなわち文化運動であり、これらの多様な諸接合の中で社会的総体を横断するイデオロギー的統一を保持することである。その過程はドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』における宗教裁判所長によって擁護されたものと同じである。ブルデューBourdieu は同様に分業としての宗教への神話の変換が諸階級を生みだすこと、それらはその起源において物質的生産とともに文化的生産の産物であることを議論している。

> 「神話の宗教（イデオロギー）への変換の歴史は、宗教的言説や儀礼を専門とする一群の生産者の形成の歴史、すなわち宗教的分業の進行の歴史から切り離すことはできない。それは、それ自体、社会的分業の進行の一つの次元であり、したがって諸階級への分割の進行である。そうした分業は、他の諸結果の中でもとりわけ世俗の人々からの象徴的生産の道具の剥奪へと導くのである」（Bourdieu, 1977, p.409）。

宗教的活動は文化生活の全領域へと拡大する過程の一

局面に過ぎない。ヘゲモニックな文化は構造化された知とコミュニケーションの道具、常識と道徳的秩序の基礎であると同時に、それらを構造化するものでもある。階級社会においてそれは階級支配を押しつけ正当化する政治的役割を果たしている。このことはなぜマルクス主義自身においてかくも容易に文化的な視点が失われたのかを理解することを助けてくれる。資本主義においてヘゲモニックな地位を獲得しているのはブルジョア・イデオロギーであり、したがってその文化が常識を定義している。資本主義的生産の客観的諸条件――労働と資源としての人間と自然の関係、資本として現実化された生産手段および生活手段からの人間主体の分離、市場による剰余労働の配分、したがって商品の物神性――のもとでは、資本主義における生産は意識において必然的にひとり物質的財の生産という意味にのみ還元されてしまう。ウィリアムスはそのことを次のように述べている（Williams, 1972, p.92）.

「マルクスは、『生産諸力の出現が…自給自足的世界を構築する』ような社会にかつて生き、そしてそうした社会に今われわれも生きている。したがって単に知覚されるのみならず現実に中心的な様式となっている生産諸形態の作用の分析において、利用可能な通用言語のみに依拠していると、あたかもそれらが普遍的かつ一般的であるとか、あるいは他の諸活動に対するそれらの諸関係の一種の『法則』が根本的な真実であるとするような記述へ容易に滑り込んでしまう。マルクス主義はそのようにしてしばしば特種ブルジョア的色彩を帯び、資本主義的な唯物論を採用してきたのである。」

資本主義において生産とは市場のための商品の生産を意味し、他の人間的・社会的活動は生産的領域から除外され、「上部構造」の様々な部分として物象化されてしまう。マルクス主義者自身がこのような物質的生産からの文化の概念的分離を免れていないという事実こそが、ブルジョア的「常識」の力を証明している。唯物論は、もしそれが決定論的諸法則の概念的枠組みを社会的存在に対して押しつけるという観念論的誤りを免れようとするならば、伝統的に上部構造に対して割り当てられてきた諸要素をその中に含まなければならないのである（Thompson, 1978）。

文化地理学とマルクス主義理論－統合へ向けて－

ウィリアムスとトムスンは資本主義のもとでの文学史と労働者階級の文化史をそれぞれ検討して、グラムシ的実践への理論的力を与え、文化理論におけるマルクス主義的還元主義を正確に批判した。文化地理学が伝統的に最も類縁性を保持してきた分野である人類学においては、サーリンズ（Sahlins, 1974, 1976）が同様の議論を文化の象徴的解釈へと練りあげていった。そこで彼は、実体主義的人類学理論と提携しながら、象徴的生産諸様式における文化の場所を提示していったのである。こうした見方は、社会構成体における文化の能動的役割に対する真正な関心を維持しながら、文化地理学の伝統的目的のいくつかと史的唯物論との統合を可能としてくれる。

『石器時代の経済学』（1974）において、サーリンズは人間活動に関するあらゆる形態の効用論的解釈を攻撃している。人間意識が客観的・物質的世界に基礎づけられていることを認める一方で、彼はカラハリ砂漠や中央オーストラリア砂漠のような明らかに不利な地理的環境においてさえ豊富な生活素材が存在したということを証明している。人間の社会行動の基準線としての希少性の観念――それはわれわれに生計維持の目的のための特定のおきまりの社会組織を思い起こさせる――は、市場社会における労働の客観的諸条件に基づいて前資本主義的構成体に投影されたブルジョア的仮説である。歴史的に特殊な資本主義の社会と行動の諸条件を普遍化することは、学問自体におけるイデオロギー的闘争の一部なのである。実際、生存手段の選択は常に文化的に決定されているのである。

物質的活動と文化に関する効用論的解釈と象徴的解釈との間の議論は弁証法的に媒介することが不可能な純粋な対立であったとサーリンズは主張する（Sahlins, 1976）。効用を文化の基礎とするいかなる理論も、それが経済的なものであれ、環境的・生態学的なものであれ、現実の人間的産物としての文化に対する決定論的否定へと導いてしまう。「こうしたすべてのタイプの実践理性は…おしなべて人間の象徴化作用に対しては貧弱な概念しか持ち合わせていない」（Sahlins, 1976, p.102）。人間存在の弁別的・構成的な質としての意味の創造がいったん無視ないし否定されるならば、人間は自分自身の歴史を作るというマルクス主義にとっての鍵概念は破綻してしまう。

マルクスの初期の著作において、土台という概念は実際のところ上部構造の概念によって媒介されている

のである。「もし経済が『究極的な規定要因』であれば、それは同じく一つの『決定された規定要因』でもある。なぜならそれは最も精神的な諸媒介をも含む具体的な諸媒介の常に具体的で歴史的に変化する複合体を離れては存在しないからである」（Sahlins, 1976, p.132）。マルクスは資本主義社会の種別的考察に向かったことによって、彼自身もまた資本主義社会の諸カテゴリーと諸構造によって影響づけられているのである。生産は労働にその基盤を置き、労働価値論が支配し、そして労働は財の生産としてその物質的種別性において定義されるのである。したがって「象徴的秩序は生産から除外され、人間の頭脳において形成された『幻影』として、すなわち物質的生活過程の昇華物として再現するものとされてしまう」（Sahlins, 1976, p.136）。われわれは、象徴的秩序の生産がそれ自体人間的労働の一つの次元であるという重大な認識を忘れてしまうのである。

使用価値、すなわち特定の社会における必要性の体系は文化的に決定されている。サウアーはその点について世界資本主義市場における小麦の生産に関して完璧な事例を提供している（Sauer, 1942, p.376）。

> 「小麦やとうもろこしに関して一定区画における生産量がどちらが栽培されるかを決定するという見方は、世界市場とそれゆえ厳密に商業的生産という観点においてのみ真実である。私は、現在の世界市場価格でさえも支配的購買集団の文化的需要の表現に過ぎず、決して様々な穀物の有用性の現実的表現ではない、ということを付け加えるべきだと思う。」

したがって環境改変者としての人間主体についての地理学的議論は、社会的活動の効用論的説明という意味におけるあらゆる形態の決定論を拒否しなければならない。われわれは自然環境が人間の行為に制限を加えるということを受け入れるが、しかしこれらの制限は予言者としては無価値なほどに広範なものである。さらに「自然の行為は…それ自身の形態においてではなく、意味として具体化された形態において、文化として展開する」（Sahlins, 1976, p.209）のである。それゆえいかなる地理学的議論も文化的に包含されたものとしての環境という認識から出発しなければならない（Glacken, 1967 ; Tuan, 1968）。どのような文化的図式をも満足させるに違いない自然のただ二つの諸条件とは、マルクスとエンゲルスが史的唯物論の諸前提において素描したものである。すなわち、そこに人間たちが状況づけられるような自然の諸条件と、人間の身体的自然の諸条件とである。しかしこれらもまた文化的に述べられねばならない。強調やコード化のために文化によって設けられた一定の物質的な二項対立の選択は、現実的・自然的なものか、あるいは形式的に知覚されるような二項対立でなければならない。例えば道徳的カテゴリーを表示する生と死、内と外という二項対立を意味するための基本点の選択は、発見可能な自然の二項対立か、あるいは形式的に知覚される諸関係と相似したものに基づかなければならない。自然自体の客観的諸関係を否定するような様式や、あるいはすべてのコミュニケーションを不可能とするような様式で、自然を文化的に領有したり搾取したりすることはできないのである。そのような諸条件はいかなる文化的意味をも決定することがないか、あるいは文化的意味を予測することを不可能とする。このことが地理学の実践を通して経験的およびコンテクスチュアルに説明されねばならない。そのような厳密に限定された「自然の諸条件」を離れてしまっては、「人間的自然」や「環境」あるいは「隠された心的諸構造」といったいかなる主張も的外れである。構造的な諸水準の認識論的分離を行ない、そこから実証科学のやり方でそれらの「諸関係」を探求するのではなく、象徴的に構成された生活様式としての生産様式の統一性から着手しなければならない。もしすべての人間的生産が象徴的に構成されているとするならば、われわれは生産諸様式を象徴的生産諸様式と言い換えることが可能かもしれない。それらの各々が生産諸力を構造化する特定の生産諸関係によって差異化された一つの生活様式なのである。しかしこれらの生産諸関係は象徴的生産の制度的中心――そこからすべての構造的な諸水準を横断する意味の地図が描かれる meaning is mapped ような地点――を通じて文化的に差異化されている。資本主義社会において、象徴的生産はまず第一に財の生産者としての経済において生起する。「ブルジョア社会の特異性は、経済システムが象徴的規定を免れるという事実にではなく、経済的な象徴化作用が構造的に規定しているという事実にこそ存在するのである」（Sahlins, 1976, p.211）。この点を普遍化するイデオロギー的試みが土台－上部構造モデルの基礎には横たわっている。非－資本主義的あるいは前－資本主義的構成体においては、象徴的生産の支配的な場所は経済

ではないほかの場所に位置しているのである。

ポランニーほか（Polanyi et. al., 1958）やサーリンズの議論によって与えられた導きの糸に従えば、そこでの象徴的生産の支配的な場所が異なって位置づけられる三つの広範な生活様式を示唆することができる。（1）「未開」社会“primitive” societies――ポランニーによれば経済統合の支配的様式として互酬性を特徴とする社会――においては、象徴的生産の主要な場所は親族の社会的構成のうちに在る。このことは、財の生産者としての経済や景観をも含む他のすべての諸制度に対して横断的に地図化されている。それは文化的に決定された諸目的に到達することを可能とすべく、生産諸力の可能性と限界を決定するのである。(2)「古代」構成体“archaic” formations は、象徴的生産がまず第一に政治－宗教的部門に位置づけられ、次いで他の諸部門へと地図化されるような様式によって支配されている。こうした様式は聖なる中心の周囲に同心円化された構造的景観の基盤を提供しており、ポランニーはこれを再分配の社会と言及している（Eliade, 1959；Wheatley, 1969；Harvey, 1974）。最後に（3）資本主義社会は経済を支配的地位にまで高め、それによって「文化的上部構造全体を分類のグリッドで覆い、それ自身の差異によって他の諸部門の弁別性をも秩序づけてしまう」（Sahlins, 1976, p.216）のである。

これら三つの象徴的生産諸様式はおおまかなアウトラインと分類を提供するものに過ぎない。それらはポランニーの言う経済統合の三つの形態――互酬性、再分配、市場経済――に類似している。しかし、前資本主義的構成体に対して土台－上部構造モデルを逆転させ、そこにおいては経済が社会に「埋め込まれている」と主張したポランニーと異なり、これらの三つのカテゴリーはすべてにおいて文化的包含という概念を維持しており、マルクスに由来して象徴的生産が支配的となる場所の位置においてのみそれぞれが異なっている（Marx, 1964；Hindes and Hirst, 1975）。しかしそれらは単線的発展の諸段階とみなされるものではない。とりわけ未開でも資本制的でもないような諸様式については、確実にさらなる洗練が可能であろう。その際支配的諸様式のもとでの下属的諸様式の存在が、社会経済構成体の特性を基本的に定義するものと認められる。そのような象徴的生産諸様式の概念こそが、環境改変者としての人間主体の検討において文化地理学の体系的研究を洗練する有効な分析概念となるのである。

このように象徴的生産諸様式は特定の諸社会についての諸定義ではない。それらを採用する地域研究ないし景観研究は社会経済構成体概念のもとで、すなわち「一つの社会における生活の多様な経済的、社会的、政治的、文化的諸領域の…統一を表現し」（Sereni, 1971, p.21）、その総体を特定の歴史的・地理的コンテクストの具体的諸条件の中に位置づけるような社会経済構成体の概念のもとで、最も発展するのである。セレニはこの概念を用いながらも、その上に文化が上部構造として構築される「根本的な経済法則」へと後退し、それに依拠してしまっている。それゆえわれわれは、社会経済構成体の概念の強調は地理的・歴史的種別性においてであるということ、そして象徴的生産諸様式に言及することでその経済主義が取り除かれる限りにおいてその概念が価値あるものとなるということ、以上のことを銘記しておくべきであろう。このようにして社会経済構成体の概念は文化地理学の伝統的な場所と景観が継続的に適用可能であることを示し、一方でそうした実践が史的唯物論における理論を洗練し発展させることを可能とするのである。

生産が最初から文化的意志であるということ、実存のすべての物質的諸過程が社会的存在の意味に満ちた諸過程として組織化されているということ、以上のことを受け入れるならば、われわれは依然として困難な理論的諸問題に直面することとなる。われわれは変化を、なかんずく前資本主義的構成体における変化を説明しなければならない。階級諸社会の発生を説明しなければならない。そして階級社会における象徴権力ないしイデオロギーとしての象徴的生産の領有を説明しなければならない。マルクスは次のように認識している。

> 「再生産自体の行為が客観的諸条件――例えば村落から町への変容、荒野から農業的開墾への変容 etc――を変えるだけでなく、それとともに新たな質の出現によって、生産における彼ら自身の変容と発展によって、すなわち新たな力と新たな概念、新たな交通の様式、新たな必要性、新たな言葉の形成によって、生産者が変化するのだ。」（Marx, 1964, p.93）

しかしサーリンズ（Sahlins, 1976）が指摘するように、そうした変化を統合する諸様式は様々な象徴的生産様式の間で変化するのである。資本主義においては、一段と多様性を増す市場向け財の生産諸形態の組み合わ

せを通して象徴的コードの置き換えと再定式化が進行し、それは「発展 development」と呼ばれている。「未開」の非ー西欧諸社会においては、そうした再定式化は社会構成体の間で生起し、新たな象徴的生産様式への進化ではなく多様な形態の発生へと向かう。

> 「未開社会では歴史が諸社会の接合点で生まれ、その結果一つの文化地域全体は土台と同じく上部構造においても一連の驚くべき社会的多様性を示している。『それらはすべて似通ってはいるが、しかし一つとして同じものはなく、それらの奏でるコーラスは隠れた法則への道を示唆してくれるのである』。われわれの資本主義社会では象徴過程の異なる制度的様式によって、基本的には同じ様式であるが、一つの社会の複雑性のさ中に歴史が巻き込まれてしまっているのである。」（Sahlins, 1976, p.220）

サーリンズはここでマルクスの指摘（Marx, 1972, pp.20-21；1964, p.82）を繰り返している。すなわち、未開社会において歴史は内部的に生まれるのではなく他の諸社会との接触地点において生まれるということ、そして内部的発展は階級闘争を通じて生み出される階級社会の特徴であるということ。差異化や変化という問題は経験的にのみ解決されうる。社会経済構成体という「脱出路」はそれ自体種別的であり、時代区分の一般的な編年学には還元されえないのである（Sereni, 1971）。

確かにサーリンズの言葉における「未開」ではないような諸社会のすべては階級構造を持っている。これらにおいて象徴的生産は支配階級によって領有され、また専門化された小集団によって象徴権力として練りあげられている（Gramsci, 1971；Bourdieu, 1977）。そこでは象徴構造と社会構造との相同関係が階級支配の特殊な諸関係を隠蔽してしまうのである。それゆえ、グラムシが指摘したように、階級闘争はイデオロギーのレベルで生じるのである。従属階級の狙いは、象徴的生産手段を再構成するために、そしてそれらを通じて物質的生産を再構成するために、それらのコントロールを彼ら自身の意図のもとに掌握することにある。ヨーロッパにおけるブルジョア革命の歴史は、ブルジョア階級の諸前提が一つの社会経済構成体の物質的生産諸関係とともに文化的・政治的諸前提にも十分に浸透したときにのみ、資本主義構成体への移行が首尾よく完成することを証明している（Polanyi, 1957）。こうした理由のためにグラムシは、イタリアにおいて社会主義を建設するための必須条件として真に代替可能（オルタナティブ）な労働者階級文化の構築と、常識とされるブルジョア文化の諸前提に対して挑戦することに彼の活動を集中したのである。このことは、イタリア的社会経済構成体の地理的・歴史的種別性に対する感受性と、知識人、とりわけクローチェのような知識人のイデオロギー的役割に対する注意、オルタナティブな文化の諸形態を自ら進んで試みようとする意志、そしてこれらの諸形態のうちどれが真に革命的な文化として物質的生産と有機的な関係を結びうるのかを予測することはできないという認識、以上のことを必要とした。「いかなる生産様式も、それゆえいかなる支配的社会も、いかなる支配的文化も、人間の実践と、人間のエネルギーと、人間の意志とを実際に枯渇させることはできない」（Williams, 1973, p.12）のであり、それゆえ現実の人間的実践には常に見落とされた諸源泉がある。このような人間的実践は支配的文化の中においてもオルタナティブとして発展させられるかもしれないが、しかしそれは真に対抗的なもの、あるいは支配的文化に直接的に対抗するものとはなりえないだろう。総体的生産様式の転換は、対抗文化 oppositional culture という形でのそれらの挑戦にかかっているのである。諸階級間での闘争は物質的な人間存在の文化的構成をめぐる闘争であり、その結末は予測可能な道筋に従うものではない。

ラディカル文化地理学の課題

文化地理学はその実践において、人文主義的な諸前提を支持することと、物質世界が文化的に構成されながらもなおそれ自身を文化の条件として残すという弁証法を維持することに常に失敗してきた。なぜならそうした概念はブルジョア「科学」の常識に反するものだからである。しかしこれこそがまさに人文地理学がとりくまねばならない問題であり、「マルクス主義」地理学でさえ多少とも安易に「俗流」唯物論を採用してきたことは、文化地理学にもそれとは別になお果たすべき重要な役割があることを示唆している。しかしながらここで提示された議論が何らかの妥当性を持つとすれば、われわれはその意味でもはや総体としての地理学について語りうる以上に、それ自身で特定の諸問題と方法論とを備えた文化地理学という「下位学問 sub-discipline」について語ることはできない。諸学問

として制度化された知の細分化は、それ自体資本主義文化におけるイデオロギー的ヘゲモニーの産物でしかない。史的唯物論は繊細で柔軟な理解の方法であり、伝統的に切り離されてきたすべての学問諸分野を通して、その実践を拡張し理論を洗練するのである（Thompson, 1978）。

しかしながら「地理学」が、そしてその中で「文化」地理学が、固有に携わってきた重要なテーマも存在する。それぞれの社会経済構成体は特定の空間――すなわち景観――に結び付けられ、そこで生みだされ、そしてそれ自身を再生産してきたという認識は、そうしたものの一つである。社会構成体はその歴史を空間の中に書き込んでゆく。そうした構成体の歴史は、人間的生産の諸様式の遷移を通じて、生みだされた諸形態を景観に重ね焼きしてゆく歴史なのである（Santos, 1977）。これらの生産諸様式は象徴的に構成されているがゆえに、場所と景観は直接的に人間的意味を付与されている。景観における意味の諸相は文化地理学者によって研究されてきたが、彼らの研究は特定の社会経済構成体の種別的な歴史的コンテクストへの編入を待っているのである（Cosgrove, 1978）。これはラディカル文化地理学を発展させようとする人々にとっての重要な課題である。景観に付与された意味――われわれはそれを現在の生活様式と同時に過去の生活様式の表現とも結合しようと考える――の複雑性は詳細な経験的研究を必要とする。それらは現在的であると同時に残余的あるいは創発的な文化的意味をも含んでいる。それゆえ伝統的文化地理学の歴史的視点は妥当な志向性なのである。なぜならそれは景観の諸形態と地域的特性を理解するのに不可欠だからである。

文化的生産を通じた象徴コードへの空間の編入の手段という問題もまた文化地理学の課題を提供している。階級社会における象徴権力としてイデオロギーは空間を領有し、また再生産することで、階級支配を正統化し、維持している。こうした諸過程に関するすぐれた経験的研究が、われわれの参照すべきモデルとしてすでに存在している。例えばダンカンとウォーラシュはニューヨーク近代美術館における建築空間の生産と利用を分析し、それを「晩期資本主義の儀礼」と呼んでいる（Duncan and Wallach, 1978）。その中で、すべてのモニュメンタルな建築物や景観がそうであるように、装飾的な諸要素が「その場所における諸活動の意味を接合し、拡大する…（そして）美術史家が図像解釈学的プログラムと呼ぶ一貫した全体性を形作る」（Duncan and Wallach, 1978, p.29）のである。ヴェニスの景観が美術史家や建築史家によって同様に評価されている（Puppi, 1980）。このようなプログラムは文学的素材に依拠することで、諸価値を伝え正統化する過去の神話や叙事詩、解釈を呼び起こす。そこでの空間はそうした諸価値を称賛し儀式化するように構成されている。それらは儀礼的な行動形態や特定の服装様式、発話のマナー、運動のパターンを必要とする。このようにして空間はそれ自体、支配階級の文化的コードの受容とそれへの参画を接合し強化する役割を与えられている。景観は象徴権力を構造化すると同時に象徴権力によって構造化されている。この種の分析は、聖なる中心や計画都市、風景庭園など地理学者がときおり研究する類の儀礼的でモニュメンタルな景観の分析にこそふさわしい。実際、そうした景観に対するラディカルな解釈におけるいくつかの最初の試みがなされている（Harvey, 1979 ; Rubin, 1979）。しかしこうした研究はすべての諸水準をその対象とする。例えば地籍システムにおいて示される土地の本源的分割と領有は、特定の構成体の象徴コードを反映するだけでなくそれを強化するのである。合衆国の方格測量システムの景観によって生みだされた土地の区画やタウンシップやレンジの測量線に沿って延びる道路をたどっていくことで、われわれは個人主義的で共和主義的、平等主義的な農村的ユートピアという 18 世紀末のアメリカ社会構成体の儀礼――景観の形態はなお依然としてそれを維持することに役立っている――に参加し、そしてわれわれの時代のためにそれを練り直すのである。景観におけるこのような図像解釈学的プログラムの認識と分析、そして理論を洗練するためのそれらの利用は、かつて文化地理学が取り組んだことのない課題である。

最後に、革命的実践として、文化地理学は景観の生産と維持における人間主体の象徴的貢献を明らかにし、またそれらの景観自体が象徴的生産を構造化し維持するその程度を明らかにしうるだけでなく、空間組織と景観の創発的な諸形態を批判的に検討することができるのである（Zube, 1970, 1977 ; Jackson, 1980 ; Vance, 1972）。それは解放された人間性という社会主義の使命を果たす観点からそうした諸形態を検討し、漠然とした「美学」の観点（Relph, 1976）からではなく、いかにして新たな景観がブルジョア社会の象徴コードを

維持し練りあげるのか（Western, 1978）という認識に基づく美学の観点から、晩期資本主義の疎外された景観を攻撃するのである。果たすべきは、文化的に構成されたわれわれの資本主義世界の諸前提と常識的な諸属性に挑戦するような場所の創造 place-making を歓迎し促進することである。そうした試みはオーウェンやオコーナーやフーリエが描いたものと同じような束の間のユートピアなのかもしれない（Darley, 1978；Hardy, 1979）。しかしその審判は歴史が下すのであり、その歴史はわれわれが自分自身で作りだすものである。文化地理学は、したがって、新たな文化を生みだすための闘争というグラムシの例を受け継ぐものとなるであろう。それは新たな景観を生みだし、そしてすでにわれわれが住んでいる景観に新たな意味を生みだすような、新たな文化の創造なのである。

文 献

Anderson, P.（1976）：The antimony of Antonio Gramsci. *New Left Review*, 100, 5-78.

Bourdieu, P.（1977）：Sur le pouvoir symbolique. *Annales : E.S.C.*, 32, 405-411.

Buttimer, A.（1974）：Values in geography. Commission of College Geography. *Research Paper* 24, *the Association of American Geographers*, Washington.

Buttimer, A.（1976）：Grasping the dynamics of the life-world. *the Association of American Geographers*, 66, 277-292.バッティマー, A. 著，井上朋子訳（1981）：生活世界のダイナミズムの把握．千田　稔編：『地図のかなたに一論集景観の思想一』地人書房，103-144．

Colletti, L.（1975）：Marxism and the dialectic. *New Left Review*, 93, 3-29.

Cosgrove, D.（1978）：Place, landscape and the dialectics of cultural geography. *Canadian Geographer*, 22, 66-72.

Darley, G.（1978）：*Villages of vision*. London. Architectural Press,

Duncan, J.S.（1973）：Landscape identity as a symbol of group identity. *Annals of the Association of American Geographers*,70, 181-198.

Duncan, J.S.（1978）：The social construction of unreality :an interactionist approach to the tourists' cognition of the environment. in Ley and Samuels eds.： *Humanistic geography : problems and prospects*. Croom Helm, London,269-282.

Duncan, C. and Wallach, A.（1978）：The museum of modern art as late capitalist ritual : an iconographic analysis. *Marxist Perspectives*, 1, 28-51.

Eliade, M.（1959）：*The sacred and the profane : the nature of religion*. Harcourt, Brace New York.　エリアーデ, M. 著，風間敏夫訳　（1969）：『聖と俗一宗教的なるものの本質について一』法政大学出版局

Entrikin, N.J.（1976）：Contemporary humanism in geography. *Annals of the Association of American Geographers*, 66, 615-632.

Frazer, Hart, J.（1968）：Field patterns in Indiana. *Geographical Review*, 58, 450-471.

Glacken, C.J.（1967）：*Traces on the Rhodian shore : nature and culture in western thought from ancient times to the beginning of the eighteenth century*. University of California Press, Berkeley.

Gombrich, E.M.（1969）：*In search of cultural history*. Clarendon Press Oxford.

Gramsci, A.(1971)：The intellectuals. in Hoare, Q. and Noell Smith, A. eds.：*Selections from the PrisonNotebooks of Antonio Gramsci*. New York, 5-23.　グラムシ研究所校訂版（1981）：『グラムシ　獄中ノート』大月書店

Gregory, D.(1978)：Ideology, science and human geography. Hutchinson, London.

Guelke, L.（1974）：An idealist alternative in human geography. *Annals of the Association of American Geographers*, 64, 193-202.

Harding, K.J.(1975)：Marx on cultural revolution : a review. *Antipode*, 7, 1-8.

Hardy, D.（1979）：*Alternative communities in nineteenth century England*. Longman, London.

Harris, R.C.（1978）：The historical mind and the practice of geography. in Ley and Samuels eds.：*Humanistic geography : problems and prospects*. Croom Helm, London, 123-137.

Harvey, D.（1974）：Social justice and the city. Edward Arnold, London.　ハーヴェイ, D. 著，竹内啓一・松本正美訳（1980）：『都市と社会的不平等』日本ブリタニカ

Harvey, D.（1979）：Monument and the myth. *Annals of the Association of American Geographers*, 69, 362-381.　ハーヴェイ, D. 著，佐藤いつみ・太田雅子訳（1981）：モニュメントと神話．千田　稔編：『地図のかなたに一論集景観の思想一』地人書房，225-，267

Hindess, B. and Hirst, P.Q.（1975）：*Pre-capitalist modes of production*. *Routledge*, London.

Isaac, E.（1970）：*Geography of domestication*. Englewood Cliffs ,New Jersey.

Jackson, J.B.（1980）：*The necessity for ruins and other topics*. Amherst, Mass.

Jackson, P.（1980）：A plea for cultural geography. *Area*, 12, 110-113.

Jordan, T. and Rowntree, L.（1976）：*The human mosaic : a*

thematic introduction to cultural geography. Harper and Row, New York.

Kniffen, F. (1965) : Folk housing : key to diffusion. *Annals of the Association of American Geographers*, 60, 638-661.

Kolakowski, L. (1978) : *Main currents of Marxism : its rise, growth and dissolution*.3vols., Oxford University Press, Oxford.

Leighly, J. ed. (1969) : *Land and life : a selection from the writings of Carl Ortwin Sauer*. University of California Press, Berkeley and Los Angels.

Ley, D. (1974) : The black inner city as frontier outpost. *Association of American Geographers Monograph Series*, No.7. Washington D. C.

Ley, D. (1977) : Social geography and the taken-for-granted world. *Transactions of the Institute of British Geographers*, 2, 478-512.

Ley, D. (1979) : Ideology, theory and empirical study in Marxism : approaches to urban geography. Paper presented to the Anglo French Symposium on Ideology and Geography at Emmanuel College, Cambridge.

Ley, D. and Samuels, M.S. (1978) : *Humanistic geography : problems and prospects*. Croom Helm, London.

Martin, A.F. (1951) : The necessity for determinism. *Transactions of the Institute of British Geographers*, 17, 1-12.

Marx, K. (1961) : *Economic and philosophical manuscripts of 1884*. Moscow.

Marx, K. (1964) : *Pre-capitalist economic formations*. International Publishers, New York.

Marx, K. (1970) : *Contribution to the critique of political economy*. Progress Publishers, Moscow.

Marx, K. and Engels, F. (1972) : *Feuerbach : opposition of the materialistic and ideological outlook*. Progress Publishers, Moscow.

Meinig, D. (1965) : The mormon culture regions : strategies and patterns of the American west, 1847-1964. *Annals of the Association of American Geographers*, 55, 191-220.

Meinig, D.W. ed. (1979) : *The interpretation of ordinary landscape*. Oxford University Press.

Mikesell, M.W. (1977) : Cultural geography. *Progress in Human Geography*, 1, 460-464.

Mikesell, M.W. (1977) : Tradition and innovation in cultural geography. *Annals of the Association of American Geographers*, 68, 1-16.

Murphy, R.F. (1971) : *The dialectics of social life, alarms and excurtions in anthropological theory*. Allen and Unwin London.

Newson, L. (1976) : Cultural evolution : a basic concept for human and historical geography. *Journal of Historical Geography*, 2,239-255.

Nostrand, R.L. (1970) : The Hispanic-American borderland : delimitation of an American culture region. *Annals of the Association of American Geographers*, 60, 638-661.

Plekhanov, G.V. (1962) : *Fundamental problems of Marxism*. Moscow. プレハノフ, G.V. 著, 鷲田小彌太訳 (1974) : 『マルクス主義の根本問題』福村出版

Polanyi, K. (1957) : *The great transformation : the political and economic origins of our time*. Beacon Press, Boston. ポランニー, K. 著, 吉沢英成ほか訳 (1975) : 『大転換』東洋経済新報社

Polanyi, K., Arenberg, C., Pearson, H.W. (1958) : *Trade and markets in early empires*. Free Press Glencoe, Ill.

Puppi, L. ed. (1980) : *Architettura e utopia nella Vanezia del cinquecento*. Electa Milano.

Rappoport, A. (1970) : *House form and culture*. Englewood Cliffs, New Jersey. ラポポート, A. 著, 山本正三・佐々木史郎・ 大嶽幸彦共訳 (1987) : 『住まいと文化』大明堂

Relph, E. (1976) : *Place and placelessness*. Pion, London. レルフ, E. 著, 高野岳彦・阿部 隆・石井美也子訳 (1991) : 『場所の現象学ー没場所性を越えてー』筑摩書房

Rowles, G.D. (1978) : Reflections on experiential fieldwork. in Ley, D. and Samuels, M.S. : *Humanistic geography : problems and prospects*. Croom Helm, London. 179-193.

Rubin, B. (1979) : Aesthetic ideology and urban design. *Analls of the Association of American Geographers*, 69, 339-361. ラビン, B. 著, 杉田厚子・松井久美枝訳 (1981) : 審美的イデオロギーと都市の設計. 千田 稔訳編 : 『地図のかなたにー論集景観の思想ー』地人書房, 53-98.

Sahlins, M. (1972) : *Stone age economics*. Aldine-Atherton, Chicago. サーリンズ, M. 著, 山内 昶訳 (1984) : 『石器時代の経済学』法政大学出版局

Sahlins, M. (1976) : *Culture and practical reason*. The University of Chicago Press, Chicago. サーリンズ,M. 著, 山内 昶訳 (1987) : 『人類学と文化記号論ー文化と実践理性ー』法政大学出版局

Sahlins, M. (1977) : *The use and abuse of biology : an anthropological critique of sociobiology*. The University of Michigan Press, Michigan.

Samuels, M.S. (1978) : Individual and landscape : thoughts on China and Tao of Mao. in Ley, D. and Samuels, M.S. eds. : *Humanistic geography : problems and prospects*. Croom Helm, London. 283-296.

Samuels, M.S. (1979) : The biography of a landscape. in Meinig, D. ed. : *The interpretation of ordinary landscape*. Oxford University Oxford, 51-88.

Santos, M. (1977) : Society and space : social formation as theory and method. *Antipode*, 9, 3-13.

Sauer, C.O. (1925) : The morphology of landscape. in Leighly, J. ed. : *Land and life : a selection from the writings of Carl Ortwin Sauer*. University of California Press,

Berkeley and Los Angels, 315-350.

Sauer, C.O. (1941) : Foreword to historical geography. in Leighly, J. ed. : *Land and life : a selection from the writings of Carl Ortwin Sauer*. University of California Press, Berkeley and Los Angels, 351-379.

Sauer, C.O. (1952) : Folkways of social science. in Leighly, J. ed. : *Land and life : a selection from the writings of Carl Ortwin Sauer*. University of California Press, Berkeley and Los Angels, 380-388.

Sauer, C.O. (1956) : The education of a geographer. in Leighly, J. ed. : *Land and life : a selection from the writings of Carl Ortwin Sauer*. University of California Press, Berkeley and Los Angels, 389-404.

Seamon, D.(1979) : *A geography of the lifeworld : movement, past and encounter*. Croom Helm London.

Sereni, E. (1971) : De Marx à Lenine : la catégorie de formation économique et sociale. *La Pensée*, 159, 3-49.

Singer, P. (1980) : Dictator Marx? *New York Review of Books*, 27-14, 62-66.

Sopher, D.E. (1967) : The *geography of religions*. *Englewood Cliffs*, New Jersey. ソファー, D.E. 著, 徳久球雄・久保田圭伍・生野善応訳 (1971) : 『宗教地理学』大明堂

Thomas, W.L. ed. (1956) : *Man's role in changing the face of the earth*. The University of Chicago Press, Chicago.

Thompson, E.P. (1978) : *The poverty of theory and other essays*. Merlin, London.

Tuan, Yi-Fu (1968) : *The hydrological cycle and the wisdom of God : a theme in geoteleology*. Toronto.

Tuan, Yi-Fu (1974) : *Topophilia : a study of environmental perception, attitudes and values*. Englewood Cliffs, New Jersey. トゥアン, Y.F. 著, 小野有五・阿部 一共訳 (1992) : 『トポフィリアー人間と環境ー』せりか書房

Tuan, Yi-Fu (1977) : *Space and place : the perspective of experience*. University of Minnesota Press, Minneapolis. トゥアン, Y.F. 著, 山本 浩訳 (1988) : 『空間の経験ー身体から都市へー』筑摩書房

Vance, J. E. (1972) : California and the search for the ideal. *Annals of the Association of American Geographers*, 62, 185-210.

Vidal de la Blache, P. (1903) : *Tableau de la Geographie de la France*. Hachette, Paris.

Vidal de la Blache, P. (1917) : *La France de l'Est*. A.Colin, Paris.

Wagner, P.L.ed. (various dates) : *Foundations of cultural geography series*. Englewood Cliffs, New Jersey.

Wagner, P.L. (1972) : *Environments and peoples*. Englewood Cliffs, New Jersey.

Wagner, P.L. and Mikesell, M.W. eds. (1962) : *Readings in cultural geography*. The University of Chicago Press, Chicago.

Wallace, I. (1978) : Towards a humanized conception of economic geography. in Ley, D. and Samuels, M. S. eds. : *Humanistic geography : problems and prospects*. Croom Helm, London, 91-108.

Western, J. (1978) : Knowing one's place : the coloured people and the Group Areas Act in Cape Town. in Ley, D. and Samuels, M. S. eds. : *Humanistic geography: problems and prospects*. Croom Helm, London, 297-318.

Wheatley, P. (1969) : *The pivot of the four quarters : a preliminary enquiry into the origins and character of the ancient Chinese city*. Aldine Pub. Co. Chicago.

Williams, R. (1973) : Base and superstructure in marxist cultural theory. *New Left Review*, 82, 3-16.

Williams, R. (1977) : *Marxism and literature*. Oxford University Press, Oxford.

Zelinsky, W. (1955) : Some problems in the distribution of generic terms in the place names of the Northeastern United States. *Annals of the Association of American Geographers*, 45, 319-49.

Zelinsky, W. (1973) : *The cultural geography of the United States*. Englewood Cliffs, New Jersey.

Zube, E.H. ed. (1970) : *Landscapes : selections from the writings of J.B. Jackson*. Amherst, Mass.

Zube, E.H. and Zube, M. eds. (1977) : *Changing Rural Landscapes*. Amherst, Mass.